



SNET台湾 みんなの台湾修学旅行ナビ
https://taiwan-shugakuryoko.jp/spot_north/444/



エリア

新北市

テーマ

歴史

産業

金瓜石 黄金博物園區

金瓜石の山肌に残る 鉱業遺跡を利用した博物館

九份から山道をバスで10分ほど走ると金瓜石に着きます。金瓜石では、日本統治期には日本の民間企業、国民政府來台後は政府機関あるいは国営企業によって金や銅などの採掘がおこなわれていましたが、1987年に操業が終了しました。その敷地や施設を利用して2004年にオープンしたのが新北市立金瓜石黄金博物館です。かつて鉱山で仕事をしてきた住民が、施設の保存を行政や地域住民など各方面にはたらきかけて実現したということです。園内には、鉱山の歴史、採掘や精錬の技術、鉱員の日常、金瓜石の地質を構成する鉱石の展示をしているメインの黄金館のほか、日本統治期の神社跡や皇太子(後の昭和天皇)来訪のために建てられたとされる家屋などもあります。

学 び の ポ イ ン ト

1.

黄金館のほかにはどんな施設が？

四連棟は4棟の和式家屋がつながっている建物で、日本統治期、中華民国期とも職員住宅でした。その向かいには金瓜石鉱山所長宿舎がありますが、一般には公開されていません。太子賓館は、当時鉱山を経営していた田中鉱山株式会社が、1923年に台湾をおとす皇太子の滞在先として建てたとされる和洋折衷家屋ですが、結局皇太子が金瓜石に立ち寄ることはありませんでした。黄金館に隣接する本山五坑では、もともとの坑道に新たに坑道をつけ足し、採掘の様子が再現されています。

2.

神社跡とは？

日本統治期の金瓜石神社の跡です。鳥居や石灯籠、幟立てなどを見ながらけわしい旧参道を登っていくと、平らにならされ、コンクリート柱が何本か立つ一画に出ます。ここにかつて拝殿や本殿がありました。1897年にかつて拝殿や本殿がありました。1897年に操業を始めた金瓜石鉱山田中事務所が翌年神社を設置し、1936年に建てかえられた二代目の社屋の遺構が残っています。気候や虫害による腐食を防ぐため、二代目の社殿にはコンクリートの柱が採用されたようです。

3.

第二次世界大戦期の記憶

日中戦争が長期化していた1941年(一説には1942年)、鉱山関係者や有力者ら100余名が中国側との密通や武器の密造の疑いで捕えられ、うち33名が判決を受けないまま獄中で死去しました。金瓜石事件と言います。台湾総督府による人権抑圧、思想統制がもたらした冤罪事件だったとして、地元の小学校の同窓会が園内の郵便局前に記念碑(岩石)を設置し、毎年ここで追悼式典を開いています。また博物園區から水滴洞の方向へ下ったところにある国際終戦和平記念園区は、1942年から1945年まで英連邦諸国などの兵士の捕虜収容所があったところでした。かれらは、劣悪な環境のもと鉱山労働に従事させられ、命を落とした者も少なくありませんでした。